

# 契沖の『宇津保物語』研究

中 村 忠 行

(一)

湯浅元植の「文会筆記」巻五に、服部南郭の説として、次の様な記事掲げてゐる。

一、ウツボ物語ナド盗刊ト見ヘタリ。子供ノ玩ブ利蔭ノ文字ハツツケリ。ソレヨリ後ハ、錯簡一向次第ツツカズ。コレハ大和トデヲ切分ケテ、急速ニ写シタルユエ、次第ガ散々ニナリタラントナリ。 (『日本随筆全集』巻二。六四八頁)

勿論、この見解は、探るに足らぬものであるが、延宝板本について説いた比較的早い時期の言葉として、注目してよい。

かく延宝板そのものは、開板後幾何もない頃から、兎角の蹺判があつたと考へられるが、しかもこの物語の全巻が上梓されたことは、研究史上、特筆すべき事象であつた。それは、伝本の比較的少

いこの物語を、一般に弘通せしめたばかりでなく、板本特有の巻名・巻序の錯乱が、やがて人々の注目を惹き、研究の楯口を開くこともなつたからである。同年、菅原長益が「うつほ物語系図」を著したことは暫く措くも、翌六年初冬、猪苗代兼寿が、後水尾法皇御下賜の五色料紙を以て一本を書写し、同八年初春、古筆了祐が前田家十三行本を鑑定したことも、将又、天和二年正月刊行された天下相摸掾正本「弁才天」に、

それ、わか物かたりのさうしには、こきん・まんよう・ごせんしう・しうい・きんよう、もしくはせんさい・ふうが・ぎよくよう・もしほぐさ・げんじ・さころも・くもがくれ、いせややまとやとさにつき、あいくは・うつほの物がたり、やくも、くれたけ・しきしわか、あいかたいかい・うちうぎん(じ)・こかがみ・みらいきや

と語られるのも、「宇津保物語」の名が、俄かに一般の注目を浴び

るに至つたことを、物語るものであらう。かうした間にあって、

うつほのとし蔭

時ならぬ雷を降らせし琴のをのしらへや富士の根に通ひけん

〔長流和歌延宝集〕・〔晚花和歌集〕

と詠じた下河辺長流の如きは、最もこの物語を愛読した一人であつたらうが、流石に、自著にこの物語を引くことを、怠らなかつた。

すなはち、名古屋・関戸家蔵の「土佐日記」長流・契沖書入校本に、

○かかる間にみな夜明て手あらひれいの事ともして

うつほ國ユツリノ巻に云、夜明ヌレハットメテおまししき

かへれいのことして

〔土佐日記抄〕・長流全集〕上、三四六頁

○いとけしきあしくてえず

怨

うつほ物かたりに云、春宮よりをそく参り給ふとて、ある

時はアハレニ心くるしげに、或時はにくけにえじ給ふ。

〔全 上、 三五〇頁〕

○夜行せざなりと

うつほ物かたりに、女、さうそくをトリ給て、三の宮さう

し奉り給ヒテ、かかる所よりはたゞに物せざなりと、この

御つかひに物し給へト奉り給へは、もち出タマヒテかつ  
け給ふ。 〔全 上、 三五五頁〕

○眼もこそ二つあれ

又ト取カヘン物ナキト云心ナリ。

ウツホ物語ニ云ク、其ホト俊隆カ形ノ清ラニオノカシコキ

事サラニタトフヘキかたナシ。父母眼タニ二ツ有ト思フホ

ドニ 〔全 上、 三六〇頁〕

といった長流の註記があるのは、それを物語るものである。

もっとも、これらの註記が何時頃加へられたかは、詳らかでな

い。が、『万葉集管見』(寛文初年)はじめ、『燭明抄』(寛文十

林良材集』(延宝五)など、寛文・延宝初年に成つた長流の著書には、

「宇津保」からの引用が全く見られず、『延宝集』に至って始めて、

上掲「うつほのとし蔭」の歌が見えることから推すと、彼がこの物

語に親んだのは、やはり延宝板上梓以後のことであつたらう。長流

は、貞享三年六月三日に歿してゐるから、それは晩年のことであつ

た訣である。

II

契沖の「宇津保物語」に対する関心も、亦かうした長流との交渉

に、影懸されるところが少くなかったであらう。蓋し、契沖自ら「彼翁(長流)がまだいとわかかりし時、かたばかりしるしおけるに、おのがおろかなる心を添て」と記す『万葉集代匠記』には、約廿例ほど、この物語からの引用を、見出すことが出来るからである。『代匠記』の初稿本は、天和三年に起稿、貞享四年頃の脱稿と考へられるが、天和三年は延宝五年を隔る六年の後、長流の歿年を遡る四年前のことである。而して、大阪府立図書館に寄託される円珠庵蔵「うつつほ物語の歌増河社草稿」一冊は、この頃既に成つてゐたものと解されるから、契沖も亦いちはやくこの物語を手にした一人であつたに違ひない。恐らく、契沖・長流共通の話題の一に、「宇津保物語」があつたらうことは、信じて誤りない様である。

○

円珠庵蔵「うつつほ物語の歌増河社草稿」一冊。縦二四・五、横十七。楮紙、大和綴。表紙共墨付五十六枚、本文十行書。契沖の自筆に係る写本である。その表紙左端には、打付書に

うつつほ物語の歌くらひらきの巻

全

とあるが、これは契沖の自筆ではなく、奥に

此うつつほ茂大虫入にて「やむを得ず」裏打」表紙調

八世夷仁

契 乗

と記す円珠庵八世の住職契乗の手跡である。而して、外題に「くらひらきの巻」の七文字を加へてゐるのは、内題に従つたものであらうが、正しくは、この七文字は中見出しとすべきものであり、又後述する様に、本書の巻末には「河社」の草稿が合綴されてゐるから、上記の如く書名を改めるがよいかと思ふ。因みに、表紙には、外題の右に「第廿卷号／巻冊」・「鑑査／第五七〇一号」と記した押紙がある。前者は、契乗が遺書を整理した際に、後者は、明治二十四年七月、臨時全国宝物取調委員会による調査の際に、それぞれ附されたものであることは、円珠庵蔵の他の契沖遺書と比較して見て明らかである。

本書は、もとより手控へとして遺されたものであるから、書体は相当荒く、逸した歌も多い。第一に、「俊蔭」の歌は全部収録するのを怠つてゐるし、「藤原の君」以下の巻々でも、総計四十三首を漏してゐる。そのうち、五首は挿入、十七首は省略されたものと認められるが、これらを除いてみても、尚廿一首を落してゐる缺である。が、より注目すべきことは、歌の配列が、

712 むら鳥のつるのこほりに住きしの松のえたにそけふは住ける  
以下、

藤原上・中・下(下巻、実は鶴崎院) 樓上下・上 吹上下・上 藤

原の君 あて宮 田鶴の村鳥 祭の使 初秋 菊の

宴 たたこそ 梅の花笠 嵯峨院(英は「田ゆつり」) 困ゆつ

り中・上・下(下地、英は「田」)

の順で、認められてゐることである。この巻次第は、板本のそれとは若干異つてゐるが、かなり共通するものを有つてゐる。加之、そこには、板本同様の巻名の誤りが見出され、「梅の花笠」・「初秋」・「田鶴の村鳥」と流布本系の巻名を用ゐる、「藤原の君」巻の歌「すをいてて」(一九二)・「夏のもの」(一九二)・「かくばかり」(一九三)の三首を脱し、「春日詣」(田鶴)巻の「さは姫の」(一三〇)の歌の位置も誤つてゐる。かかる事実は、契沖の拠つた本が、板本に極めて近い内容のものであつたことを物語つてゐる。しかも、「春日詣」巻末の「おく山に」(六九二)の歌以下「桂の段」の歌を欠き、「沖つ白波」(村鳥)巻の方には、  
(英)これより後十七首うた梅の花笠巻ニ入り

契沖が最初に手にしたこの物語は、長流の手次校本であつて、長流も対校中であつたか乃至は途中で放置されてゐたものを借り用ゐて、本書を作成したものであらう。件の校本は、長流の歿後、他の若干の遺書と共に契沖の架に帰し、更に朱墨が加へられて、今井似閑の所謂「契沖比較本」となつたものと、筆者は推測してゐる。  
それはともかく、右の様な次第のものであるから、従つて、本書には契沖自身の奥書といつたものはない。が、これが作成されたのは、恐らくは天和・貞享の間と目して差支へない幾つかの証拠がある。蓋し、「代匠記」はじめ、元禄初年にはほぼ成つてゐたと見られる「古今余材抄」などに引く「宇津保物語」の歌や本文は、明らかに本書に拠つたものと見られるからである。「代匠記」所引のものについては、暫く後に譲る。「余材抄」の初稿本は、熊本の書肆河島又生家蔵の契沖自筆稿本がそれらしく想はれるが、その巻六「秋風の身にさむければつれもなき」(古今集)の注に、  
(六字、朱ニテ抹消)うつほ物語くらひららきに  
いつともたのむものから秋風のふくたくれはいふかたそなき  
これは今の哥にてよめり(朱)・みゆ。  
とある。この歌は、正しくは「嵯峨院」巻の歌(一八八)である

〔契沖全集〕本、三八二頁

が、契沖はこれを「蔵開」の歌として引き、ついで朱を以て「くらひらき」の六文字を抹消してゐるのである。「蔵開」とするのは、契沖が用ゐた資料に、板本と同様な卷名の誤りがあつたことを示し、既述するところと符合する。

今一つ、決定的な証拠を指摘して置かう。同じく、「余材抄」卷九「あまつ風雲のかよひちふきとちよ」(「古今集」)の註に、契沖は、

うつは物語(上朱)  
朝ほらげほのかにみればあかぬかな中なるをとめしはしとめ  
うつは物語(上朱)  
とちこもりいはほの中に入しかと君かにほひは空にみえにき

なん (本文、河島本。全集本、五〇九頁)

と記し、「世にふればうさこそまされみよしの」(「古今集」)の類歌として、

(全。全集本、五四三頁)

を挙げてゐる。贅するまでもなく、この二首は「吹上」下巻に見られるもので、前者は四〇九、後者は四一八の歌であるが、契沖はこれを「樓上」の歌として引いてゐるのである。しかも、これが單なる誤写ではなからうことは、二例も見られること、就中、「朝ぼらけ」の歌は、円珠庵藏・契沖自筆の「百人一首改観抄」でも、彰考館藏「百人一首三奥抄」に見られる契沖自筆の頭書に於ても、「樓上」と明記されてゐる位であるから、ほとんど疑ふ余地がない。一方、

「余材抄」卷九「思ふとちまとめせる夜はからにしま」(「古今集」)の註には、

うつは樓上  
すむ人もやともあかねはまとめして世をつくすへきことちこ  
とすれ (全。全集本、五〇三頁)

として、「樓上」下巻の歌(九九九)が引かれてゐるから、若し右の様な卷名の錯乱があるとすれば、それは「吹上」下巻と「樓上」上巻との間にあつたものだといふことになる。これは、契沖の用ゐた底本が、板本乃至それに近い一本であつたとする如上の見解と矛盾する。蓋し、善要寺本以下板本系諸本の「吹上」・「樓上」両巻に見られる卷名・巻序の錯乱は、それぞれ巻の上・下間に見られる題簽の誤貼に基づくものであつて、両巻相互の間に見られるものではない。とすれば、その原因は、奈辺に在るのであらうか。

私見に従へば、それは全く偶然的な過失に基づくものであつて、とりも直さず、「余材抄」の述作に、「うつは物語の歌」が用ゐられたことを、明示するものと思はれる。今、原本について之を検するに、その第五丁裏四行目に「ろうの上のまき」といふ中見出しがあつて、同巻の歌が、下・上巻の順に抄出されて七丁裏まで続き、次いで「ふき上のまき」の中見出しの後に、同巻の歌が、やはり下・上巻の順に認められ、十三丁裏に至つてゐる。而して、「ふき上のまき」の中見出しは、七丁裏九行目つまり、綴り代に近い部分に

書かれて居り、「朝ぼらけ」・「ごちこもり」の歌は、九丁の表と裏にそれぞれ見出すことが出来るのである。それ故、誤って七・八の二丁を一緒に繰ったり、「ぶき上のまき」の中見出しを見落したりすると、右の二首が、そのまま「ろうの上のまき」の歌と誤認せられることになる。かうした過失は、極めて特殊なものの如くであるが、実際には、我々も日常時折体験するところである。而して、「朝ぼらけ」の歌の所在を、「改観抄」などにも誤ってゐるのは、「余材抄」を基としてその誤りを踏襲してしまつたか、乃至は先入観に捉はれ、記憶の俤に誤って記したからに他あるまい。これを要するに、契沖が、この物語歌の抄出を試みたのは、「余材抄」の述作以前であることは明らかで、「代匠記」初稿本でも、本書に拠つたと見られる「宇津保」の歌数首を引くから、抄出の時期を更に繰上げて、天和・貞享の頃と考へることは、決して不当ではない。本書の巻末四十九丁以下五十三丁までに収める「うつつほ物かたりの

表一

『うつつほ物かたりの詞』本文（丁数）	所在巻名	河社	備考
(1) 宮はつとめてよりくるゝまで御くします。すまはしてゝ、たかきみつしの上に御しとねしきてほし給ふ。 (四九丁オ)	蔵開中	アリ。加注。	

詞」四十一条は、かかる推測を一層明確に裏付けて呉れるであらう。  
この「うつつほ物かたりの詞」が、「河社」の「うつつほ物語云」の条（『源氏物語』本）の草稿と目すべきものであることは上に一言したが、両者の間には、若干の点で注目すべき相違がある。その一は、「河社」に引く本文の方は歴史仮名遣に改められてゐるのに対し、「詞」の本文は所謂定家仮名遣となつてゐることである。これは、それぞれの筆写された時期を暗示するものである。次に、「河社」に掲げる本文卅三条のうち、「詞」の方に見えないのは、最後の「又おなし吹上の巻に云々」以下の三条であるが、「河社」の異本を比照すれば、何れも後補たることを示す明徴がある。これに対し、「詞」に見え、「河社」では削られた文例十一条は、例外的な二条を除いて、凡て「代匠記」以下の著書に引用されたものである。以下、繰述するのを避けて、簡単にこれを表示する。

<p>(2) かなたにわたり給ひてほさせ給……(中略)……きくしはかりにはさはり給ひんや。 (四九丁オ)</p>	<p>(3) らてんのおひのはこに、ふくろにいれて、御つゝみもてまいれり。おとゝひらびて見給へは、ていしんこうのいしの帯、いとかしこきなり。 (四九丁オウ)</p>	<p>(4) いまのきさきまにこそは、はうかねをひとりにもあらず、ふたりまで、玉をみかきてもたまへれ (四九丁ウ)</p>	<p>(5) ひとひあさましくたへあひてたいめん給はりけるを、いかになめたるさまはへりけむ。 (四九丁ウ)</p>	<p>(6) 心やりに、いさゝかはかりはいらへ給へかし。うとき人にもこそ、なげのことはいふなれ。 (四九丁ウ)</p>	<p>(7) をきのうへにあるこゝちして、いやますくにおほさるゝに、 (四九丁ウ)</p>	<p>(8) さても、人のろふ人はみとせに死ぬるなり。大将、いさゝかのあしてのつゝかもあらは、朝臣のするとおもはん、いとせちにえし給へは (四九丁ウ)</p>	<p>(9) これかれ<small>(御ものかた)</small>りのつゝあてに、春宮、けふこゝに物し給ふ人々の<small>(中下(下)も)</small>なきむすめ、たれもたまひたらん (四九丁ウ—五〇丁オ)</p>
全	全	ナシ	ナシ	アリ	ナシ	ナシ	ナシ
ナシ	アリ	ナシ	ナシ	アリ	ナシ	ナシ	ナシ
<p>臆断(二三四頁)に引く。</p>	<p>臆断(三六八頁)に引く。</p>	<p>余材抄(六三七頁)・臆断(三七八頁)に引く。</p>	<p>代匠記八九四の歌(二二二六頁)</p>	<p>注。臆断(三五九頁)に引く。</p>	<p>代匠記一三二一の歌(二四一八頁) 注。臆断(三〇一頁)</p>		

<p>(10) かたちもいとこともなし (五〇丁オ)</p>	<p>(11) かはかりのことを、手たゝきてよひたてまつらんよなとわらふ (五〇丁オ)</p>	<p>(12) いたきながら立給へる、つや／＼として□<sup>(編)</sup>のいとうすき、から綾のうちきにかゝりたる御くし、をはなの末のやうなり。いとなまめかしきかたちなり。 (五〇丁オ)</p>	<p>(13) いさり入給ふすきかけ、いぬ宮玉虫のすよりすきたるやうに、あなめてたと見えたり (五〇丁オ)</p>	<p>(14) 三日、院より白かねのひけことも、白かねこかねして、わかくり松のみかへなつめなど、作り入させ給ひて、宮の御もとに、 (五〇丁オ)</p>	<p>(15) くらう人、みたれあしはうこかれず侍り。みきにかつき給ものは、みの虫のやうにてや、むくめきまいらん。(五〇丁オーウ)</p> <p>(16) また此くらへ、さきのことく、すりや有と見侍れば、(五〇丁ウ)</p> <p>(17) うちやすみたる、ねみえにきゝて、 (五〇丁ウ)</p> <p>(18) 風ひきたまひてむとて、ふさせ給ひぬ。 (五〇丁ウ)</p>	<p>(19) 後の物もいといたらかなり。御ちつけ、さゑもんの佐との、北のかた (五〇丁ウ)</p>	
<p>全</p>	<p>全</p>	<p>全</p>	<p>全</p>	<p>全</p>	<p>蔵開・上</p>	<p>全</p>	
<p>ナシ</p>	<p>アリ</p>	<p>アリ</p>	<p>アリ</p>	<p>アリ</p>	<p>アリ。加注。</p>	<p>アリ。加注。</p>	
<p>臆断(三〇二頁)</p>	<p>代匠記(初稿本) 三九六二の歌(四一四〇頁)注。余材抄(一八五頁)</p>						



<p>20 御くしよれたるしりにうちたゝなはれたる、いとめてたし (五〇丁ウ)</p> <p>21 夏はほたるをすゝしの袋におほく入て、ふみの上にきてまると ります、まひて日なと白くなれば、まるとむかひてひかりのみゆ るかきりよみ、冬は雪をまろかして、そかひかりにあてゝまなこ のうつるまでかくもんし (五〇丁ウー五二丁オ) (以下略)</p>	<p>全 祭 の 使 ナ シ ア リ</p>	<p>代匠記・総釈・此集中枕詞「たゝな つく」の条(一三三八頁)及び一九 四の歌(二四九七頁)注</p>
--	--	--

「代匠記」以下契沖の著書に引かれた「宇津保」の本文は、以上 掲げるものの他、尚次の様なものがある。

表二

契沖の著書に引かれた『宇津保』の本文(契沖全集本頁数)	所在巻名	うつほ物語の詞	河 社	備 考
<p>(1) …一説に縁<sup>アヅ</sup>育。うつほの物語、かすかまつりの下つかへは、 あそにも柳かさねきたり云々。源氏ならひにうつほにあそ にといへるは、木賊色<sup>キソクシキ</sup>肌黄<sup>ヒキ</sup>なとなるへし。 (総釈「此集中枕詞・宵によし」の条。巻一―四八頁)</p> <p>2) うつほ物かたり第十五、源中なこん嵯峨院にまゐりたまひ て、みたりかくひやういたはりについて云々。 (万葉集二二八の歌注。巻一―四三二・四三三頁)</p>	<p>春日詣</p> <p>楼 上・下</p>	<p>ナシ</p> <p>ナシ</p>	<p>ナシ</p> <p>ナシ</p>	<p>河海抄・若葉下</p> <p>全</p>

抄材余今古	記匠			
<p>(6) うつほ物語第三にはく、すみわたりける所は、そのあたりはひえの坂本、小野わたり、音羽川ちかくて、滝の音水のごまあはれに聞ゆる所なり。今案、此音羽の滝を、または音なしの滝ともいふ歟。 (卷十七。九二八の歌注)</p> <p>(7) 源氏手習に：(中略)；又、いてとのもりのくそあつまりこといふにも云々。花鳥、うつほ物語にも此詞有。京くそたちともいへり。うつほ物語に、たゝこそといふ名あり。</p> <p>(卷十九。一〇五四の歌注)</p>	<p>(5) うつほ物語に、しろかねの鮎に、わかなあつものひとなへといへり。 (全。一八七九の歌注。三一三〇頁)</p>	<p>(4) ふさたをりは、ふさやかにたをるなり。うつほ物語国ゆつりの巻に云。ところくより、おかしきものともふさにたてまつれたまへり。同初秋に、北のかた、きぬあやふさにとうて、えさせ奉りたまふ。</p> <p>(全。一五四九の歌注。二一五六五頁)</p>	<p>(3) うつほ物語に、しろかねの御たらひ、ちむをまろにけつりたるぬきす、しろかねのはんさう、しろかねのすきはこなとかけり。 (全。五五四の歌注。一一八七六頁)</p>	
<p>全 藤原君</p>	<p>忠こそ</p>	<p>蔵開中</p>	<p>菊 宴</p>	<p>内侍 督</p>
<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>花鳥余情・手習</p>	<p>花鳥余情・夕霧</p>	<p>河海抄・若菜上</p>		

勢 語 臆 断

<p>(8) うつほ物語に、いとほしたなき心をなして、あすらの中にましりぬ。あすらは阿修羅なり。</p> <p>(天福本、一段。二一六頁)</p>	<p>(9) しほしりは、うつほ物語藤原の君の巻に、いやしき女のいへる詞に、はたけうちいきて、むきますはかりきのふなんちきりあつめて侍。なにのこもつほしりにいれて、まうてきぬとかけり。</p> <p>(全、九段。二三四頁)</p>	<p>(10) むこかねは響の器量也。うつほ物語に云。女御后かねなどのたいに住たまはむには、いかてか上にはのほり侍るへき。又いはく、今のきさきにこそは……</p> <p>(全、十段。二三七頁)</p>	<p>(11) うつほ物語に、おとうとの宮はよつ、御くしかたのわたりにて、あに宮のやうなり。</p> <p>(全、二三段。二六〇頁)</p>	<p>(12) うつほ物語に、おほきなるかはらげをとりにて、中納言あるしのおとくにまゐりたまふとて云々。</p> <p>(全、八二段、三三八頁)</p>	<p>俊 隆</p> <p>ナシ</p> <p>ナシ</p>	<p>藤 原 君</p> <p>ナシ</p> <p>ナシ</p>	<p>国 譲 上</p> <p>「今のきさきにこそは」以下あり。表(4)参照。</p> <p>ナシ</p>	<p>蔵 開 下</p> <p>ナシ</p> <p>ナシ</p>	<p>蔵 開 上</p> <p>ナシ</p> <p>ナシ</p>
---	---	--	--	--	--------------------------------	----------------------------------	---	----------------------------------	----------------------------------

これらの引用文は、何れも「うつほ物かたりの詞」・「河社」には見えぬものであるが、よく注目してみると、「代匠記」・「余材抄」に引かれる文例と、「臆断」のそれとの間には、一線を画して考ふ

べき性質のものであることが、容易に缺る。すなはち、前者に於ける「宇津保」の例文は、大半が「河海抄」・「花鳥余情」など、「源氏物語」の古註からの採引であるのに対し、後者のそれには、契沖

自らの手で拾った跡が窺はれるのである。このことは、「うつほ物かたりの詞」と同種の手控へが、他にも存在したらうことを暗示する。その抄出は、元禄初年に行はれたものであらうか。

(三)

嗣って、「代匠配」・「余材抄」以下、契沖の著書に引かれたこの物語歌について見るに、大別して、(一)、類歌乃至は古歌の心を取った物語歌として挙げられたもの、(二)、語釈その他の考証に、例証として引かれたものの二者に、分つことが出来るであらう。例を「余材抄」に取って説明すれば、類歌として挙げられた歌には、次の如きものがある。

○君かため春の野に出てわかなつむわかこるも手に雪はふりつ

… (中略) …

<sup>万葉</sup> 君かため山田のさはにゑくつむと雪消の水にもすそ沽ぬ

<sup>うつほ</sup> 君かため春日の野への雪間わけふのわかかなを独つみぬる

<sup>大祐</sup> 朝露にしとゝに袖をぬらしつゝ君かためとそわかなつみつ

る

<sup>大和物語</sup>

君かため衣のすそをぬらしつゝはるの野に出てつめるわか

なそ

(巻二。全集本、一五四頁)

○やとりして春の山へにねたる夜は夢のうちにも花ぞ散ける

六夢の中の思夢は、思ふことをやかて見れば、春の山への

たひねにはさもあるへき事也。

<sup>うつほ</sup> ちる花も夢にみゆなる春の夜を君ほかにてはいかにねよと

そ

<sup>大祐</sup> うつゝにはさらにもいはし桜花夢にもちると見えはうから

ん

<sup>新古今</sup> いもやすくねられさりけり春の夜は花の散のみ夢に見えつ

つ

(巻二、全集本二〇〇頁)

「古今」の歌の心を取って詠まれた歌としては、次の様なものが挙げられてゐる。この種の例歌と右の類歌との間に、契沖は若干の区別を設けてゐたらしく、又以下に述べる例証歌的な面を伴って語られるのが、通例である。

○さくら花とくちりぬともおもほえず人の心そ風も吹あへぬ

或注に、花は咲比さき、ちる比ちる物なれば、とくちりぬ

ともおもほへず。桜のごとくとくちる物はなしと思へる

は、人の心ぞ、風もふかぬにとなり。風も吹あへぬはふか

ぬ也。これは、人の心ぞといふをも句としたり。吹あへぬ

は、不<sub>レ</sub>吹<sub>レ</sub>敢<sub>ニ</sub>なり。吹間をまたぬ心なり。只ふかぬといふにあらす。すへて、此注はいはれなし。用へからす。此心は、花のちるよりも、惜む人の心の静ならぬ事をいはむとて、風も吹あへぬとはよめり。人の心のしつかならぬは、風による物ならねと、花は猶風を待て吹あへたれば、さていへるなり。うつほ物語に、これを取て、

花よりも静ならぬは君やさは風も吹あへぬ心なるらん  
前後しつ心なしとよめる中に有て、此うつほ物語の歌にもかく心得てとられたれば、風も吹あへすうつろふといふにはあらぬ也。……  
(巻二。全集本、一八七頁)

○年をへてきえぬおもひはありなからよるのたもと猶こほりけり

……うつほ物語くらひらきに、  
きえずのみもゆる思ひもあるものを何かたもとのこほりしもせん

是は今の歌を取てよめるなり。

(巻六。全集本、三九八頁)

○あさみこそ袖はひつらめ涙川身さへなかるときかはたのまん  
浅みこそといふに、ふたつのやう有。ひとつには、俗に河の深き所を深み、浅き所を浅みといふ。万葉に、浪こそあ

さとよめるも是なり。然れば、涙川の浅<sub>上声</sub>みこそと、体にも心得へし。ふたつには、里遠み山近みなどいふことく、浅ければこそと用にいへる歎。涙川の浅みまでおり立てやめばこそ、袖のみはひつらめ。逢見むがために、瀬瀬をいはず、ただ渡りて身さへなるときかば、たのもしき心とおもひてあはむと也。うつほ物語菊宴に、

涙川うきてなかるゝ今さへや我を人は人のたのまさるらん  
是、今の歌を取てよめり。返し心によりて、いよゝききの説を思ふへし。……  
(巻七、全集本、四〇七頁)

次に、語釈の例証として引かれたものは、  
○うつせみの世にも似たるか花桜さくと見しまにかつ散にけり  
…花桜かは桜同じ物歎。六帖には別に<sub>初稿本ナリ、再稿本行間ニ初稿入</sub>出せり。うつほ物語に、花さくらのいとおもしろき花ひらに、

思ふ事しらせてしかな花さくら風たに君にみせずや有らん

此花桜のはなひらといへる、<sub>(初稿本、朱ニテ傍書)</sub>一種と聞えたり。貫之集に、

雨ふれば色さりやすき花桜うすき心もわかおもはなくに  
色さりやすきといひて、色によせてうすき心といへるは、常の桜にあらず。…  
(巻二。全集本、一八一頁)

の様なものであるが、多くを語る必要はあるまい。この種の考証で

むしろ注目すべきは、

○天川もみちをはしにわたせばはたなはたつめの秋をしもまつ  
顯昭の本には、もみちを舟にと有て、注云、崇徳院御本に  
は、橋にとかゝれたるに、橋をなほして船とかゝれたり。  
但、実方集云、

天川かよふうき木にことゝはんもみちの橋はちるやちら  
すや

然者、古今に紅葉の橋と有本に付て、如此詠かとも覺た  
り。随近来人多橋と詠歎。密勘云舟橋唯一説也。船とも橋  
とも風情よりこん時共に可き詠用一也。今按六帖もまた今の  
本におなし。うつほ物語に、

秋浅みもみちもしらぬ天川何を橋にてあひわたるらん  
これも、今の歌にてよみたれば、古本は橋にて侍りけらし。

(卷三。全集本、二三四頁)

といった類のもので、契沖の識見もさることながら、この物語歌  
が、十分消化された形で利用されてゐることに、更めて驚かされる  
のである。

勿論、かうした物語歌の引用は、初稿本(類本)と再稿本(河島)以下の  
もの(水戸・徳川家)との間に、若干の出入がある。例へば、『余材抄』  
卷五「なにしおはばいさこととはむ」(古今集)の詞書の註が、初

稿本では、

…うつほ。語吹上物に

(案カクヤ)  
名にしおふ関をもこえし都鳥こえするかたをも、しきにして

(消抹テ=朱)

都鳥友をつらね。かへりなは千鳥は浜になく、やへむ  
みやこ鳥ちとりをはねにすへてこそ涙のつとて君にとらせめ  
君とは、いかゝたへむ浜にすむ千鳥さそひてこしみやこ鳥  
名にしおふ関をもこえし都鳥こえするかたをも、しきにして  
いと、しくこえうきものをみやこ鳥せきのこなたに聞かうれしさ

(全集本、三二八頁)

となつてゐて、改削の意志のあることを示してゐるし、卷二「久か  
たの光のとけき春の日に」(古今集)の註の

…うつほ物かたり國ゆつりの巻に、今の歌を取て、

ふく風に花はのとかにみゆれともしつ心なきわか身なにそ  
も  
(全集本、一八八頁)

卷三「ほとゝきす人まつ山になくなれば」(古今集)の註の  
六帖、滝部に、

ゆく水のわか心にしかなはねは人まつ滝となりやしぬらん  
これは似たるつゝけやうなれと、松滝といふたきによせてよ  
めり。うつほ物語、あて宮に、

よそにのみかくなからふる袖よりは人まつ滝の落ぬ日そな

き

返し

まつたきといかゝたのまんよゝをたにねをとゝめてしわか  
るとおもへば

これらに、あはせて見るべし。(全集本。二二八頁)

卷七「しのめのほからく」とあけゆけば(『古今集』)の註の

うつほ物語明ゆけときぬきさまぬしのゝめの老の世にてもわひしかり  
しか

きぬくのぬれてわかれししのゝめぞ明る夜ことに思ひ出ら  
る (全集本。四一四頁)

とある部分の如きは、円珠庵所蔵の如水筆写本に於ても、行間に傍  
書されてゐて、後年の番入れたることを示してゐる。

又、「伊勢物語」六五段「女いとかたははなり」の条に係る「臆断」  
の註、

かたはといふ言は、矢よりいふ歟。随羽あるへきか。片羽なる  
は、ふようの物なるにたとへていふ歟。うつほ物語、初秋のま  
きに、

つはものゝ腹にやとるはつらけれとかたはに見えぬをとやな  
りけり

かたはなる名のをとやにも聞ゆるは思ひいらるゝころにも有

かな

秋の夜の数をかゝせん鳴のはの今はをとやのかたはにはせん  
大鳥のはねやかたはに成ぬらんいまはをとやに箱のふるらん  
右のうち、後の一首によらは、鳥の片羽にたとへて、かたはも  
のといふにや。(全集本、三一〇頁)

の如きも、三手文庫本以下の諸本には見られるが、如水筆写本

(四珠)には見えず、かたがた「源註拾遺」・「はゝき木」巻「かたわ  
なるへきもこそゆるし給はねば」の註に、

○今案、先かたわとかける仮名誤まりて、注もこれに随ひてあ  
やまれり。鳥の片羽よりいふ詞なれば、かたはとかけり。う  
つほ物語初秋の哥に、(以下、歌四首、右に同じ。略す)

(全集本。四〇五頁)

とあるのを考へ合せるならば、後補たることは明らかである。現  
に、天理図書館蔵「源註拾遺」契沖自筆本でも、これが細字を以て  
補入されてゐて、元禄十一年正月、同本一校に際しての加筆と目さ  
れるし、「和字正濫要略」(元禄十一年五月成)には、

中下のはわにまがふ中に、俗にまがへぬは  
これをおく。まがふるを出して注す

○片羽 かたは うつほ物語に、矢に付てかたはとよめる歌三  
四首見えたるにより、仮に真名をかくかけるは、仮名に合せ  
たるなり。かたはといふ事は、鳥の片羽、若は片羽なるは用

なければ、たとへて名付たる歟。沙石集に尼が二人ともなひて大津を過けるが、車の片輪あるを見て、一人がいはいはく、此車は大乗せしれるものなりといふ。いかにと問へば、かたわがあるほどにといひければ、今一人がいふやう、いなそしらぬものなり。いかできはたまふといへば、かたわのなければ申すなりといひけるよし。物の中に、車の片輪は殊に用なき物なれば、これもいはれたるやうなれど、かたほといふ詞もかたほにかよひて聞ゆる事おほき上、伊勢物語などにも、かたほとかける本おほく、うつほ物語はふるきものにて、証するにたればかくなん。(全集本 五一九頁)

といった考証もあり、元禄十一年の頃、契沖がしきりにこの問題を考へてゐたことが、窺はれるのである。

元禄六年頃から二三年の間、契沖の努力は、専ら「河社」の述作に注がれてゐた。「河社」には、契沖の自筆本と目すべきものに、水戸彰考館本・円珠庵本とがあるが、円珠庵本の紙背も亦「河社」の草稿である。案するに、紙背本が初稿、彰考館本が再稿、円珠庵本が三稿となるのであらう。これらの稿本には何れも奥書がないが、内部後証によつて、元禄八年頃には、一応完成したものと考へられてゐる。

この「河社」には、上來屢々触れ來つた「うつほ物語云」の条はじめ、數項にわたる「宇津保」関係の記事がある。以下、それらについて少しく補説すると、まづ「うつほ物語云」の条の後半には、考証なり所見なりを加へたものが多いことが注目される。

うつほ物かたりの詞	卷所名在	河社
<p>④ すへてわか子のためあしからむことは水の上にある雷いさ<small>(こ)</small>の上にをくつゆとなし給へと聞えをきてかくれ給ぬ (五一丁オ)</p>	忠こそ	<p>同、すへてわか子のためあしからむことは水の上にある雷いさこの上におく露となしたまへときこえおきてかくれたまひぬ。金葉集に 藤原成通 水の上に降しらゆきの跡もなく消やしまし人のつらさに これはおのつかからかよへる歟。又、兼盛集に、 こひしとはいへは更なり水の上にふりつむ雨と人はしらなん 同、源少将は山こもりにし日よりこくをたち垣たちてこのみ松の葉をすき</p>
<p>⑤ 源少将山こもりにし日よりこくをたち垣たちてこ</p>	吹上上	



のみ松の葉をすきて六時まなくおこなひて泪を海  
とたへなけきを山とおふして歎きわたるをみか  
よりはしめ奉りておしみかなしまぬ人なし。

(五一丁オーウ)

いとせちにおもひたる物からさらにあはれたるけ  
しきは見えす  
(五二丁ウー五三丁オ)

例文②に対応する「河社」の指摘は、類似的発想の歌に止まる  
が、④の方は、はっきりと「宇津保」の歌を本歌と断じてゐること  
が、論の当否は別として注目される。④の「すく」の語義について  
は、「詞」の傍註にも、「送日本記」とあるから、早くから気付か  
れてゐたのであらう。「源陰拾遺」でも、

一、さるへき物つくりてすかててまつる。○今案、日本紀第  
二十四皇極紀云、以水送飯。うつほ物語に、松の葉を  
すきてといへり。(若菜) (全集本。四二〇頁)

一、松の葉をすきてつとむる山ふし……うつほ物語、源少将は山

て六時まなくおこなひてなみたを海とたへなけきを山とおほしてなけ  
きわたるをみかとよりはしめたてまつりてをしみかなしまぬ人なし云々。  
皇極紀に送飯をいひをすくとよめり。詞花集に、和泉式部

あしかれとおもはぬ山の峯にたにおふなるものを人のなげきは  
(全集本。一九頁)

同、いとせちにおもひたる物からさらにあはれたるけしきは見えす  
春風の吹上にはふさくら花雲の上にもさかせてしかな

新勅撰集に、家隆卿

時しあれは桜とぞ思ふ春風の吹上の浜にたてる白浪

これは右の哥にてよみたまへり

(全集本。廿二頁)

にいりし日よりこくをたち松の葉をすきて云々(余白)  
(総角) (全。五五三頁)  
と記し、本文の引用に及んでゐる。「河社」の文は、すぐ後の「な  
けきを山とおふして」に及んでゐるから、更に考へを發展させてゐ  
ることになる。

次に注目されるのは、「拾遺集」との関聯から説かれる次の二条  
であらう。

一、おもひきや我まつ人はよそなからたなはたつめのあふをみ  
んとは

おもふことなすこそ神のかたからめしはしわするゝ心つけ  
なん

初の哥は拾遺集卷二に、後の五にいれり

(全集本。廿一頁)

一、かうふり柳を見て

仲文

河柳糸はみとりに有ものをいつれかあけの衣なるら  
此歌、惠慶法師が集にも載たり。おほつかなし。(三手文庫本)

うつほ物語菊宴に、なにはのはらへにかうふり柳にいたり  
たまひて、  
大宮

名にしおはゝあけの衣はときぬはて緑の糸をよれる青  
柳

猶そこにての哥ともあり。みをつくしたてたる所をみをつ  
くとなつくることく、かうふり柳あるところを、やかて  
かうふり柳と名つけたるなるへし。ふせやにおふるはゝき  
木の例ならば、冠のなりにしけれる柳有けるにや

(全集本。八六頁)

前者の「おもふこと」の歌は、「風葉和歌集」の編者によつて、

「さて、うつほのなすこそ神といへるうたは拾遺集にいり」と指  
摘されるものであるが、契沖は全くこれとは別個に気付いたもので  
あらう。「宇津保」の成立年代を考究する場合、「拾遺集」との関係

は重要な意味を有するから、契沖のこの指摘は誠に貴重なものと言  
はなければならぬ。序でながら、契沖は、これを「拾遺集考要」  
や「源註拾遺」(大倉)に於ても再説してゐるが、三手文庫蔵に係る  
「拾遺集考要」の契沖自筆本では、後からの補筆たる跡を示してゐ  
る。「拾遺集考要」は、元禄九年か十年に成つたものと考へられ、  
「源註拾遺」も、元禄九年七月に成つたのは二巻以下で、首巻は  
翌十年頃に書かれたものと推定されてゐる。とすれば、契沖が右の  
事実気付いたのは、元禄九年前後のことであらうか。「河社」で  
は、彰考館本・円珠庵本共にこれを本文中に記すが、これはそれぞ  
れの本の浄書せられた年代を暗示する。

次に、「かうふり柳」の考は、契沖の地名研究の副産物であらう。  
「万葉集」や「古今和歌集」等の研究にまつはつて、歌枕研究の必  
要性を痛感した契沖は、元禄五年「勝地吐懐篇」を著して里村昌琢  
の「類字名所和歌集」の誤りを正し、同九年にはその補訂を試み、  
翌十年には「類字名所補撰抄」を脱稿してゐる。殊に、後者には  
「宇津保」の歌百三首を引くが、この一条は、かうした一連の研究  
とは無縁であるまい。因みに、校異を以て示した三手文庫本による  
補入文は、「契沖雑考」卷三に、「一、拾遺に、かうふり柳の哥、仲  
文／惠慶法師集に御座候。仲文集にも無之、追加に見え候。惠慶集  
に其由、拾遺并仲文集に可被加注候」と見える契沖書翰の一節を直

接反映するものであるが、この補入文は円珠庵本にも見えない。円珠庵本と三手文庫本との間に、四稿本ともいふべきものの存在が考へられる。

かく、「河社」は、成立後も幾度か加筆訂正されてゐるが、加筆されたものの中に、「宇津保」研究に相渉るものが尙幾らかある。「うつほ物語云」の条の末に見える「たゝこそ／わかやとに時々吹し秋風の」の条は、彰考館本・円珠庵本共に朱筆を以て行間に補入されたものであるし、「かしは木に葉もりの神のましけるを云々」の条の

……うつほ物語ゆつりの巻に

おひてさはも、かしはにやなりにける子の日をちよとかそ  
ふへき松

此も、かしは、百葉にて、小松の葉の、百はかりあるをいへる  
歟。(全集本。二五頁)

といった行文も、彰考館本にはなく、円珠庵本では細字を以て補入され、三手文庫本に至って本文中に繰込まれて来るのである。

因みに、右の「おひてさは」の歌は、実は「葎開」下の歌(七九)であるが、契沖はこれを「困ゆつり巻」の歌とする。これは件の歌の引用に当って、既述「うつほ物語の歌」が、依然として用ゐられた為でもあらうが、より注目すべきは、同様な誤りが、元禄十年四月

に成った「類字名所補翼抄」所引の歌にも、かなり見られるといふことである。既にして、「宇津保」の板本の巻名・巻序に誤りがあるべきことは、契沖もある程度察知してゐたであらうが、それも未だ十分なものではなかつたことを、如上の事実は物語る。換言すれば、元禄十年四月の頃、契沖は未だ今井似閑本を披見する機会に恵まれなかつたか、披見対校してゐたにしても日は浅く、巻名・巻序の問題についてすら、十分な認識を有つてゐなかつたことを暗示する。

#### (四)

今井似閑が、契沖に師事したのは、元禄七・八年頃のことと考へられてゐる。裕福な長者で、世間の顔も広かつた彼は、門弟とは言ひながら、精神・物質の両面で、晩年の契沖の支へとなつたらしい。契沖が、松下見林の蔵する「日本書異記」・「凌雲集」・「怪園集」残巻・「都氏文集」・「難後拾遺集」等を借覧し得たのは、似閑の斡旋によるものと考へられるし、似閑自らも善本を求めて、師の研究に供したことが、一再ならずあつた様である。されば、契沖も似閑を呼ぶに「翁」の敬称を附してゐるし、図らずも臨摸し得た肥後本妙寺蔵の伝宗尊親王筆「日本紀寛寂和歌」の如きは、副本を一部調

製して似閑に贈り、平素の厚志に酬いてゐる程である。<sup>(2)</sup>「宇津保物語」研究の場合にも、この様な交渉が見られることは、敢て怪しむに足りない。

契沖が、似閑の蔵する「宇津保物語」を披見したのは、元禄十年仲秋以前のこと、事實は更に半年以上を遡るものであつたらう。今日、契沖の自筆校本は伝存しないが、その内容を伝へるものに、三手文庫蔵の今井似閑本がある。似閑本には、「樓上」下の巻末に、次の様な奥書がある。

難波東高津密乗沙門円珠庵契沖<sup>師</sup>。以比较本一校畢

于時宝永元年霜月 日 洛 東 隱 士

洛東隱士とは今井似閑のこと、宝永元年霜月は、契沖の歿<sup>(元禄十一年十二月六日)</sup>後三年十個月のことである。

勿論、契沖校本は、板本若しくは板本に近い一本を底本とするものであつた筈であり、似閑本は浜田本系の一本である。従つて、似閑本を通して契沖の研究成果を窺ふには、ある種の操作が必要である。例せば、似閑本の各巻の冒頭には、「第十六イ」(としかけ)・「第七イ」(藤原君)・「第九イ」(たゝこそ)といった朱筆の注記がある。示される巻序は、契沖校本の巻序であるから、契沖校本にはこの様な注記が施される筈はなく、その反対に、「一、としかけ」・「二、ふしはら君」・「三、たゝこそ」と、似閑本の巻序が記されて

ゐたと考へねばならぬ。行間のイ本の校合も、板本若しくはそれに近い内容のものであるから、さして重要な意味を有たない。又、「三、ならひ」(春日詣)巻末には、前田家十三行本系諸本に見る如く、例の「桂の段」を収め、

以下以異本書加之(朱)

左大将殿桂におもしろき所。おほいなるとのつくり…(墨)

以下おきつ白浪の巻ニアリ第八也(朱)

重出(朱)

とあるが、よく注視すれば、「左大将殿」以下は本文とは別筆で、後からの書入れであることは明らかである、右肩に朱注せられた「以下以異本書加之」という文字も、契沖校本にはあるべき筈がないから、似閑の加筆と解せられ、左肩の「以下おきつ白浪の巻ニアリ云々」及び本文の右に傍書せられた校異が、契沖校本にあつたものと見なければならぬ。校異の末に記す「八」は、「八、おきつ白浪」巻の謂である。

似閑本との対校は、契沖に裨益するところ尠からぬものがあつたらう。まづ、これによつて、板本特有の巻名・巻序の問題には、ある程度解決の目途がついたに違ひない。もっとも、似閑本「春日詣」・「内侍番」は巻名を開き、それぞれ「三、ならひ」「第七」とするばかりであるし、「菊の宴」と「樓上」上との間には、題籤の

誤貼があったりするから、問題の凡てが氷解するには到らない。これに処する契沖の態度は、極めて慎重である。例せば、「嵯峨院」巻を板本では「葦開」下に誤るが、契沖は、

集中蔵ひらきの事ミえすさかの院事いさゝかあり(嵯峨院)と記すのみで、断案を下すに到ってはなない。「菊宴」・「樓上」上巻についても、似閑本「菊宴」(葦は、樓上)の表紙見返しに、

(巻) 集中菊宴事不見、以異本ヲ可証歟。

「樓上」上(葦は、樓上)の見返しに、

(巻) あて宮番宮へいまたまいり給はぬうち(葦は、樓上)の事有。是巻亦ならひ歟と注するに止つてゐる。

しかし、ここに注目すべきは、問題の解明に当って、契沖が徹証を内部に求め、科学的な方法を以て、立論を試みようとしてゐることである。一二を例示するならば、「祭の使」巻の位置を、諸本何れも「吹上」巻の前に置くが、板本系諸本のみは、後に次第してゐる。その何れを探るべきかについての契沖の見解は、似閑本「祭の使」巻の表紙見返しに、

集中紀国源氏ヨリノ哥三所ニアリ。吹上巻ノ次ニアルヘキ歟。

但、紀国ヨリアテ宮ノ事ヲ伝ヘキ、テ消息セル歟。

とある注記に徹して明らかであるが、本文中にも

吹上ノ巻ノ後ニアルヘシ(巻)

「きのくにのまきあけのきみの御もとより」

ココニアルハ前後スル歟

(三八七—三八八頁)

と注し、根拠を明示してゐる。更に又、似閑本「俊隆」巻頭の遊紙には、

(巻) 源氏若菜上下二分ツ例

河海抄曰、うつほの物語、又第五ふきあけの上・ふきあけの

下、十二くにゆつりの上、十三同書之下、十四さくらの上、

十五同下

といった注記がある。同様の注記は、「吹上」上・「國談」上・「國談」中巻の題籤にも朱書せられてゐるが、かかる事実は、契沖が徹証を内外両面に求めながら、巻序の整理を企図してゐたことを物語るものである。

既にして、当初、契沖が手にした長流の校本には若干の書入れがあった所為か、板本特有の本文の錯簡については、契沖もいちはやく気付いてゐたらしい。而して、「うつほ物語の歌」の示すところからすれば、当初、契沖は、「桂の段」を、浜田本系諸本の示す如く、「沖つ白波」巻末に置いて考へてゐた様であるが、やがてこれに疑問を懐くに至つたものと思はれる。同巻末「ふちのかゝれるを松のえたなからおり云々」(九〇九頁)の条りに頭注して、

フチ以下アテ宮ノ「ナリ。闕文無疑、錯乱セル歟。アテ宮春宮ニマイリ玉フ前ノ「ヲ記ス。

と記し、その下文「母北方をみておはして心やりあそひ」(九一頁)の左には、

内侍ニナリ玉ハヌ時也

と、朱注してゐる。これに従へば、契沖は、「桂の段」を「春日詣」巻末に置くべく考へてゐたものであらうか。「いとまよらに云々」といふ「貴宮」巻末文の「春日詣」巻への置入については、似閑本「春日詣」の補筆部の当該個所に、「已上第八重出ノ以下アテ宮ノ巻ニアリ」、「貴宮」巻の件の個所に、「重出、已下異本ナシノ以下、三ならひの巻ニアリ」と朱注するのみで、契沖の積極的な見解は窺ひ知ることが出来ないが、錯簡を正し得たであらうことは、想定して誤りあるまい。

板本を基に試みられた国学者の「字津保物語」の研究は、文字通り慘憺たる苦心の連続であった。契沖も亦その例に洩れるものではない。似閑本を接するに、行間に「上廿一枚右」・「下五枚右」・「次丁ニミニユ」・「詞哥ト不叶、此間落タルカ」・「脱作者歟」・「哥一首脱」・「此所おちたる事有」などといった注記が無数にある。何れも統解に苦慮した跡を示すものである。これと並んで

イヒアサミ マナコタニフタツ有 イハホムラ

コノメケフリテ 血ヲサンアヤシ コトノコエシラマズ

文ノミチヲヂロク ハナツク アヤマチシタルカリ

サエノカミ カハラカセ イヘノアバル、

といった特殊な表現や語彙の頭注せられるものも多い。この種の語彙の中には、

コケノスダレ(俊蔭) 名高き帯(忠こそ)

春日詣(春日詣) リウノツノ・かくら歌(嵯峨院)

の如く、後年、猪苗代謀宜によってその係採用され、同校本に見られる章段の標目となったものがある。

勿論、語注も妙くない。以下、主要なものを、若干抄出しよう。

上段が注、下段は当該本文で、括弧内は古典文庫本の頁及び行数である。

俊蔭

。熟コトス 木をきりこなす(七頁三行)

。粉ヲコブルト云フ有。又氷テカ ゆきふすまのこことくこふりて (三八頁五行)

。引歌 うときよりしもといふなれば

。カタキハアソヒ手トイフコト 御かたきをはしりたてまつらし (四〇頁十一行)

クアヒ手ナリ

(五二頁十一行)

。大麥フトムカチカタ和名十七

かちかたなと(五九頁一行)

。故事

我孝のこならば云々(六三頁三行)

。ほんと云俗語

ほにいさたまへ(六八頁七行)

。葉盤。サストハ刺也。葉ヲツ

くほてにさして(八七頁七行)

。マリテクボテニツクルナリ

。和名四相摸下云、本朝相摸記

すまひのほて(一〇九頁八行)

有<sub>レ</sub>古手垂髮總角最<sub>レ</sub>手助手等

之名。別亦有立合相摸長也。

藤原君

。近江

うらせはみあとかはしまの

(一四〇頁六行)

。花蔭 後撰春中

はなかけにたちより給て

(一四三頁七行)

。前ニバクチト云ル人ナルベシ

すくろくのぬしたち

(一五三頁二行)

。源氏 宇治卷

くそたち(一五四頁二行)

。國語注云、鈍音博漢語抄云、

佐比都恵、蝸風也。釈名云、

鈍追地去章也。

さいつゑつきて(一六九頁三行)

。サスハ麥ニテ背サシトイフ物 むきさすはかり(一八二頁四行)

ヲスルヲ云賦。背サシハ世ニ

モアルコトニテ清少納言モイ

へリ。

。間

これひとまにたてまつれ

(一八五頁十一行)

。面 綱 日本紀

しりへてにしり

(一八七頁十一行)

。移鞍オキタル馬ナリ

うつしむま(一九五頁四行)

。奉 遣 日本紀

まほりものたてまつせん

(一九八頁七行)

。拾遺 恋二 よみ人しらす

思ひきやわがまつ人は

(一九九頁三行)

(以下略)

かうした注記の中には、しばしば注目すべき見解が見られる。

「思ひきや」・「思ふこと」の二首が、「拾遺集」に見えることをい

はやく指摘してゐるのもさうであるが、「春日詣」巻の

篋のはかせをさむみ春日山かすみのころもけさはたつかも

(二六六頁)

に注して、「統後撰春上 六帖」とあるのは、爾後ほとんど人の

注目を惹かぬものであるだけに、特筆して差文へあるまい。蓋し、契沖の旨ふところは、右の歌が、

うぐひすの羽風をさむみ春日野の霞の衣いまやたつらむ<sup>は後撰例</sup>

〔古今和歌六帖〕卷一・霞

と同一歌であり、『統後撰集』春上にも「詠人しらず」として収められてゐるといふにある。三手文庫蔵、契沖自筆の書入のある「古今和歌六帖」には、この注記は見られないが、「元禄丁丑仲秋廿六日寛功ノ密乗沙門契仲」の奥書を伝へる植村正路手沢「古今和歌六帖」(国会図書館蔵)には、欄外に「うつは物語 梅花笠」と注記されて居り、本文にも物語歌による校異が施されてゐる。既述、「思ひきや」・「思ふこと」の歌の問題と併せ考へて、契沖がこれに氣附いたのが、元禄九・十年の候であつたらうことを想定したい。勿論、かうした注記の中には、失考や鑿ち過ぎた見解がないではない。例へば、「忠こそ」の巻末文「かのやまへ入とてものかきつけしこととりて見給に、かきつけたるものをみつけて」(二五四頁七行)に注して、「万石ニウリシ前歌」としたり、「春日詣」の冒頭部「かくて二月廿日になんまで給ひける」(二五八頁九行)に注して

二月廿日 子待ノ月十九夜ヲ云 下五紙左初端・云リ。但、辰ノ時ヨリ申ノ時マテ舞奏 廿三日給給フトアレハ 廿一日ニシ

テ廿日ヲ子マチトイフ歌

と記したりしてゐる。前者は、俊蔭が源忠経に奉った「かたち風」と、橋千蔭に奉った「おりめ風」とを混同した為に生じたものであるが、これらの琴名の表記は、物語の本文自体に混乱があり、一条北方が、「この時の大将に万石に売りて遣ひける」(二五三頁七行)とある時の大将を「春日詣」の本文に従つて源正頼と解釈すると、年立の上で矛盾が生ずるといふ問題の個所である。又、後者については、契沖は、二月廿日正頼一族京を進発、廿一日春日社参、廿三日京へ帰着と考へてゐたらしいが、後出の仲頼の和歌の序や兵部卿親王の歌によつて明らかにならぬ、廿日に社参が行なはれたので、正頼一族の出家は、その一兩日前と考へた方が穏やかである。「菊宴」巻の所謂重複文中の「かゝるほどにしも月のつごもりばかりになりぬ。しんじやうゑのころ、春宮よりかくの給へり」(五九三頁九行)に注して

霜月晦日はかりに新嘗会と云は、源氏に七日の月を朔日の夕月  
夜といふ類歌

と言つてゐることなどに共に、聊かの考へ過ぎと評して差文へない。かうした事例は、尚幾つか指摘出来るが、しかし、さればと言つて、為に契沖の研究の価値が低く評価される筋合のものでは、決してない。むしろ、元禄期にあつて、これだけの成果を収めてゐる



ことは、松雲公前田綱紀の本文研究と共に双璧をなすものであって、松雲公のそれが君侯の余技として孤絶してゐるのに対し、後代の国学者に与へた影響の大きさは、はるかに彼を凌ぐものがある。「宇津保物語」研究史上に於ける契沖の存在は、やはり偉大であるといふ他はないのである。

#### (四)

似閑の蔵書は、その歿後、遺志によつて上賀茂三手文庫に納められることとなつたが、奉納に先立って、蒐書の大部分(二〇八部、四二三冊)が、長州藩によつて転写されることとなつた。蓋し、長州藩では、享保四年、萩城下に藩校「明倫館」が創設され、蒐書の必要を痛感してゐた為、年来藩の御用達を勤め、扶持を給せられてゐた今井似閑の蔵書に、目が着けられたのである。その間の経緯については、弥富破摩雄・石川卓美氏の研究に詳しいが、これが今日も山口図書館に伝襲される「大黒屋本」である。

「大黒屋」とは、似閑の屋号である。大黒屋本は、転写に際して、もとより忠実を期したであらうが、直接目的とするところは右の如きものであり、且つ、転写に十分な時間的余裕が與へられなかつた。従つて、出来上つた新写の本の個々について見る時は、尚若干の問題を含むものが生ずべきは、致し方ない所であつた。大黒

屋本「宇津保物語」も、亦その一例である。

原来、似閑本「宇津保物語」は、浜田本系の一本であるから、「春日詣」巻末には、例の「桂の段」を含む本文を有してはゐない。而して、似閑は、契沖校本との対校を試みた際、これを本文中に続けて記し、朱を以て「以下以異本書加之」と傍注するに止つた。書加へられた本文は、似閑本では、墨色・筆蹟共に異なることが識別されるから問題はないが、大黒屋本では、一筆でその俵に書繼がれてしまつたから、本文は一見前田家本の様な体裁を有つ鶴的な写本に姿を変じてゐる。さうした点で問題は残るけれども、契沖が心血を注いだ注記はその俵に転写されたから、契沖の学風は長州藩にも伝へられることとなつた。もつとも、長州藩に於ける大黒屋本の扱ひは極めて嚴重であつたばかりでなく、「宇津保」といふ特殊な物語のことであるから、これがどれ程、長州の国学に裨益したかには、尚検討の余地がある。

一方、三手文庫に納められた似閑の遺書も、文庫の規約によつて、幕末までは容易に他の披見を許さなかつた。かくて、契沖校本の内容を後世に拡めたのは、実に似閑本を転写した若冲校本であつたと想像される。蓋し、植松茂岳校本・須賀通舎校本に、「若冲云」(「嵯峨院」巻表紙見返し)・「若冲梓帯云」(「忠こそ」巻卅四丁ウ頭注)といった注記が見られるのは、それを物語る。蓋し、若冲の蔵

書は、晩年多く大阪天王寺の明静院に入り、一部は散り、又火災に焼失してしまつたが、借覽は比較的自由であつたから、世上に流布する上からは、却つて大きな役割を果たしたのであつた。かの伝爲氏筆「梶中納言物語」の本文の如きも、その信憑性はともかく、似閑校本自体によるよりは、明静院本によつて、国学者間に珍重されるに至つたものである。

契神校本の流布について、今一つ忘れ得ぬことは、寛政七年十一月から同十二年十月にかけて行なはれた猪苗代謙宜と加茂季鷹との会談である。少しく前後の経緯について説明を加へると、これ以前、兩者の蔵本には、それぞれ次の様な校合が加へられてゐた。すなはち、謙宜校本には、万治板本(後臨卷)・北辺(富士堂)本・入江(龜)本による校合や、桑原やよ子の「宇津保物語考」にも引かれて著名な猪苗代氏の私考が加へられて居り、季鷹本には、寛政三年江戸に於て試みられた明阿校本の書入があつた。これらの諸本中、入江氏の蔵本は、小山伯鳳の「竹取物語抄」の頭註に加へられた昌憲所引の本文から推すと、板本に校異を附したものであつたらしいが、「嵯峨院」巻末には、

昌憲曰、此続第十卷菊宴をと子ノ段に連続して可見。

といつた独自の見解が記されて居り、明阿校本にも、亦例の真淵の

錯簡考が記されてゐた。

かくて、この会談は、当初は「嵯峨院」・「菊の宴」間の所謂重複問題の処理を主眼に試みたものと想はれるが、漸次他巻に及んで、遂に全巻の会談となつたものらしい。而して、この間に於て、兩者は互に相手方の校本の校異を写し取つたが、又会談に際しては、契神校本の校合をも試みたのであつた。季鷹は、上賀茂神社の社家の出であるから、この契神校本が今井似閑本であらうことは、疑念の余地がない。以下、植松茂岳校本・須賀通舎校本等に遺された奥書によつてその経過を示すと、次の如くである。

嵯峨院 寛政七年十一月以猪苗代氏本再校畢 季鷹

吹 上上 寛政八年二月十四日与猪苗代氏一校畢 加茂季鷹

吹 上下 寛政八年三月四日再校畢

藤原の君 寛政八年四月九日賀茂県主季鷹と一校畢

忠こそ 寛政八年八月 日賀茂季鷹県主と一校畢

猪苗代法眼謙宜

菊の宴 同八年十月廿一日契神阿闍梨校本をもて猪苗代氏と

もによみ畢 季鷹

俊 蔭上 寛政十二年十月六日賀茂季鷹県主と一校畢

法眼謙宜花押

俊 蔭下 寛政第十二十月廿二日賀茂季鷹県主と一校畢

奥書に、謙宜・季鷹の署名が入混ってゐるのは、校合し合ふ裡に、互にそれぞれの巻を取違へ、一種の混り本になつた為と見られる。

この校本は、当時多少評判となつたらしく、文化の頃、榎並隆隨が、季鷹本による校写を試みてゐる。隆隨校本の所在も、今日尚詳らかでないが、植松茂岳校本その他によつて、而影を十分窺ふことが出来る。而して、植松校本に拠れば、隆隨校本の「俊隆」上の見返しには、謙宜校本の識語・季鷹校本の校合凡例に続いて、次の様な隆隨の覚書が記されてあつた。

以上、加茂季鷹臬主の本をかりて、それかはし書のまゝにかきのせる也。此本ハ、契沖あさりの本はやく校正して朱墨を加へ置たれハ、同事かさね出さす。藍をもて校したるハ、皆季鷹翁の本也。又、隆隨<sup>(マツ)</sup>か今按をくはへたる所も藍をもて書たれと、そこには今按又隆隨案なとし置たり。

季本の朱青紫ハ、別にわかちしるさす。翁の本書を見て、けちめを知へし、今ハ、たゞ契季のとりわきまでに、朱藍をもて戒たり。

植松校本には、更に巻首に、似閑本・板本の巻序を対照した目錄や、前掲「河海抄」の本文を抄出した二葉が挿入されてゐるが、そ

の端に、

此目錄河海を引たるなども、みな今井似閑の契本をうつされたる也

とある。この注記は、若沖の口つきに似てゐるし、上記の如くその所説の散見せられるものもあるから、隆隨の言ふ「契沖あさりの本」が、若沖校本に拠るものであつたことは明らかである。而して、植松校本には、後人の手がかなり混つてゐるが、契沖校本のみは、比較的よく復原出来るもの様である。が、惜むらくは、季鷹校本まで表記に注意が払はれてゐた北辺本・入江校本・季鷹校本などの校異は、もはや識別が困難となつてしまつた。これは、隆隨校本系の諸校本を扱う場合、注意しなければならない点である。

隆隨は、原来、富士谷御杖に就いて国学を修めた人であるが、さうした関係からか、彼の校本は、やがて御杖の転写するところとなつた。蓋し、上述の北辺本は、天明八年正月の回禄に焼失した為、御杖の校合となつたものと想像される。この御杖の自筆校本は、今日も尚伝存し、松井簡治博士の架を経て、静嘉堂文庫に收藏されてゐる。而して、御杖校本を転写したものに、東京教育大学附属図書館蔵の須賀適舎校本があり、宮内庁書陵部蔵の大橋長意本にも、書入れの転写が見られる。須賀適舎とは、同本に今一つ印額を捺す吉野氏弘隆の室名で、やはり御杖に学んだ人であるらしい。大橋長意

本は、清水浜臣本系の伝本であるが、文久二年から三年首夏にかけて、御杖の自筆校本による書入れが施されてゐる。同本に緑筆を以て記されてゐるのが、すなはちそれである。長慈は京都の人、長広の男、俗称泰之助、金衣と号した。長広は、文政三年浜臣が京阪漫遊を試みた時以来の知友であつた。

弘化二年二月から翌三年にかけて、陸璣校本は、矢代久道によつても校合された。矢代氏は尾張の国学者であつたらしく、名古屋大學に蔵せられる一校本にも、その奥書を伝へるものがある。久道の校本は、後に植松茂岳の架に知し、茂岳の手が加へられた。茂岳の書入れは、「楼上」下の末に、

校ニ玉ト印シハ玉琴也。木ト印シハ木曾ヨリ出シ写本也。玉琴

校異の跋に云……(中略)……万延元年十月朔日玉琴校異木ヲ

以テ校合畢

とある様に、本文に加へられたのは、「玉琴」の校異本と木曾本の本文である。後者は、神谷元平校本に校せられてゐるそれと、同一のものであらう。又、茂岳は、鈴木朗系の校本をも見たらしく、同系校本による頭註の書入れがある。恐らく、間島正興校本によるものと目されるが、推測の範圍を出ない。茂岳の子有圃も、亦「宇津保物語」に親んだことが諸家の校本によつて知られてゐるが、嘉永から安政・万延にかけて、尾張の国学者間の「宇津保」研究熱はか

なり見るべきものがあつたから、かくて契沖の考説は、この地方の国学者達に、かなり珍重されたものと見られる。因みに、陸璣校本の流れを汲むものとして、今一部、尾上榮舟博士の蔵本があり、「<sup>註</sup>日本文学大系」本の校訂に利用されたと聞くが、同校本は未だ披見するを得ない。

寛政八年、賀茂季鷹が猪苗代謙直と会説した際、契沖校本が參攷に供せられたことは、上述の如くであるが、これを契機として同校本は、江戸の国学者間にも、伝写されるに至つた。かの細井貞雄もその一人で、文化の頃これを比較してゐることは、南粟文庫舊蔵の貞雄校本に徴して明らかである。

註(1) 久松潜一博士「契沖伝」第二編第五章「歌集及び年代未詳の著書」の

「四、年代未詳本及雑著」(朝日新聞社版「契沖全集」第九卷)

(2) 同前、第一編第五章「四、契沖の門下」・第四編第二章「三、契沖と今井似閑」その他。

(3) 拙稿「桑原やよ子の「宇津保物語研究」参照

(4) 弥富敏摩雄氏「賀茂文庫と今井似閑」(「国学院雑誌」第十六卷四号。後「近世国文学の研究」所収)

(附記) 河島家蔵「古今余材抄」の本文については、当時熊本大學に教授して居られた野口元大氏に確認を御願ひした個所がある。銘記して謝意を表する。